

APコースがない高校での課題と対策
ー日本語とことわざを通じた学習力の向上ー
Challenges and Strategies at the Exam School without AP Courses

ホームマン・道子 (ボストン・ラテン・アカデミー)
Michiko Homann (Boston Latin Academy)

< 現状報告 >

ボストン市の公立高校で、市内に三校しかないエグザムスクール(試験と成績によって入学が許可される大学進学校)の一つであるボストン・ラテン・アカデミーには、英語、科学、数学、社会などの分野の科目にて多くのAPコースが設置させている。外国語の中では、学校のカリキュラム基盤となり100年以上の伝統をもつラテン語、そしてスペイン語にのみ常時設定のAPコースがあるが、その他の語学(フランス語、中国語、日本語)には現時点でAPコースが存在しない。

当校では、92年に国際交流基金により日本語プログラムが開講され、以後プログラム存続の危機に何度も面しながらも、この10年間で日本語学習者の数は大幅に伸び、97年に50名ほどだった学習者が、現在では120人前後に増加。一時期は学習者が150人に達したが、三年前に開講された中国語の影響を受け若干生徒数が減少したものの、その後も安定した学習者数を確保している。しかし、三年間の必修学習を終え、四年目(シニアの年)の学習を希望する生徒が多いにもかかわらず、日本語三がプログラム最後のコースとなっており、学校側にはAP日本語コース開設の意図は全く見られない。これには、日本語教師一人に与えられる生徒数(各クラス上限31名)や、クラス数(一日5クラス)が限られていると言う事に加え、財政面から二人目の日本語教師を雇う事の難しさも原因の一つとなっている。

< 問題と課題 >

APコースが存在しない三年学習の中で、学習内容を深く掘り下げながら学習者の到達度をAPのレベルに近づけ、大学での継続学習がしやすい環境を作るための工夫が必要とされる。そのため、カリキュラムや指導の中において、初期学習の段階(Pre-AP)とAPとの関わり方が重要となってくる。又、大学進学までに一年間の空白が生じることにより、それまで達成した学習や語学力が失われ、又将来に向けた学習への意欲が失われる結果が多分に見られる。

APコースの有無にかかわることなく、Pre-APと呼ばれる初級段階からの学習にて、基礎作りに重点を置きつつも学習内容の幅を広げ奥行きをもたせることにより、学習者の能力を引き出し、大学での多様な学習形態に対する応用、適応力の強化につなげることが可能になる。そのためには、使用教科書など与えられた教材の枠を超え、APコースで求められている「考える力」や「応用力」を生かすことが出来る教材作りへの工夫が求められる。

＜事例紹介＞

その一例として上げられるのが、学習一年目の基本的語彙や表現力を使った「ミニ絵本」の作成。そして、学習二年目のリサーチを基礎とした日本語による仮想旅行記プロジェクト「ぼくと私の日本旅行」の作成発表である。そして、学習三年目には「日本の昔話」と「ことわざ」を使用した授業を行っている。これらの題材は、使用教科書である「アドベンチャー日本語」でも紹介されているが、APコースの内容に対応させ、将来の大学での学習に役立てることに加え、語学学習の域を超えた人間教育の一貫として、さらに奥深い内容で取り扱っている。ここでは、日本昔話とことわざをテーマにした学習の実例を紹介する。

＜事例1：日本昔話をテーマにした学習＞

日本昔話の学習では、日本文学への紹介を兼ね、物語の面白さを味わわせることができる。物語自体は、生徒に合ったレベルのものであれば日本語で学習するが、社会学習も兼ねているため、物によっては英語版のもので物語を学習する。ここでは、語学学習の域を超え、日本社会や文化への認識理解を深めながら、自己生活や現代社会との接点を見つける機会ともなる。

物語を読み終えた後の学習ステップとして、昔話の登場人物や生活背景、歴史の中における当時の文化や風習を分析し理解促進をはかる。例えば、登場する小動物や人物の性別、年齢、職業などに注目する。そして、物語を通して伝えられるべき教訓、道徳、又はメッセージを認識すべき、クラス内で互いに意見交換をしながら、日本文化への理解を深める。その中で、異文化における昔話や物語を通し、比較文化学習を行う。この中で、ことわざや格言との照らし合わせ学習も行う。

この段階における学習の効果として、幅広い語彙や表現力の習得、文学鑑賞力や批判的思考の育成が上げられる。そして、自分たちの生活を振り返りながら、多様社会における類似点、相違点に気づくことが出来る格好の機会ともなる。

次の学習ステップでは、「紙芝居」という独特の日本文化を学びながら、生徒自身で日本文化を取り入れた昔話風の物語を創作し、紙芝居の作製活動に入る。導入には、Allen Say の“**Kamishibai Man**”の本を紹介し、言葉抜きのコマ漫画でストーリーを再現する。創作物語には、日本文化の特徴、生活教訓や道徳などを含め、登場人物においては日本との関連性と持たせることが条件となっている。このプロジェクトでは、自由な表現と創造性を重視しているため、初期段階における基本となる語彙や文法表現等に関する指導のみで、教師の介入は最低限度にとどめている。

この段階における学習では、物事を簡潔に順序立てて書き、自分が伝えたいメッセージを伝えるための工夫が行われ、相手に理解されやすい表現力の向上が上げられる。その中で、周囲に理解され、鑑賞の対象となる創作物語を書く事への楽しさを感じ、自己の持つ日本

語力にも自信がつく。そして、既存の知識やスキルに加え、新たな語彙、豊かな表現力を身につける機会ともなる。聞く側としては、新たな創作物語を鑑賞しながら、作者の意図を把握する理解力の向上にもつながる。

ちなみに、このプロジェクトは基本的には個人プロジェクトとしているが、状況に応じてペアワークの活動も許可している。その場合は、タスク内容や物語の長さなどを調節し、個人ワークとペアワークのバランスを保つようにする。

< 事例2:ことわざ >

ことわざ学習のメリットとして、身近な言葉や表現が使用されていることと、生活に密接していることが上げられる。又、ことわざに出てくる語源を探ることで日本文化や社会の象徴をとらえながら、異文化との比較を通して人間としての接点を見つけることができる。そして、何よりの学習効果は、実生活を通じた体験や自分たちの住む社会を振り返ってみる格好の機会となることである。

ことわざ学習では、まず日本語で書かれたことわざを声に出して読み、語彙の直接的意味を理解する。そして、その言葉の裏に隠れている意味を理解し、日本文化や社会とのつながりを考える。(例えば、なぜ「となりの花は赤い」で「赤」なのか、「花よりだんご」でなぜ「だんご」なのか、など。)そして、日本昔話での学習同様、異文化間におけることわざや格言を探索し、その中における類似点や相違点に注目し、それぞれの文化や社会とのつながりを考える。

次の段階では、自分の周囲を見回し、ことわざに適した事例、シナリオを見つけ出す。そして、選択したことわざの例となるべき行動や社会現象をもとに短いストーリーを書き、クラス内で発表して作者の意図について話し合う。又、余興として、ことわざを動作で表現して学習の効果につなげる。

ことわざ学習における効果として、多くの漢字を含めた幅広い語彙、ポイントをついた簡潔な表現力の習得、又は既習内容の復習の機会が上げられる。そして、要因と結果を含んだ文章を、順序立てて簡潔に書く力がつき、一歩進んだ日本語の表現力が身につく。又、短文を多く読む事で、様々なストーリー性のある物語に触れる事ができる。そして、昔話同様に批判的思考の育成につながり、自己社会を含め、多様社会における類似点や相違点への認識理解が深まる結果となる。

< まとめ >

これまでの対策としては、一年次より創作文を取り入れ、二年次にて多くのプロジェクトを通し日本語能力とスキルを大きく上に伸ばしている。その例として、次のことが上げられる。

(1)教科書にとらわれることなく、カリキュラムの一部として多くのプロジェクトを平行して行い、応用力の強化に努めている。

(2) 日常を通し、情報を簡潔にまとめて報告する練習を取り入れ、柔軟又は自主的に使える日本語を奨励指導している。

(3) 三年次にて、口頭筆記の両面において文章の書き方や口頭発表のコツを、通常の授業や課題の中で取り入れている。

(4) 中等教育の教師間での定期勉強会にて、情報意見交換を頻繁に行っている。

高校における今後の課題としては次のことが上げられる。

(1) 限られた時間の中で、APコースにつながる内容をいかに早い段階で初級コースに導入し、三年学習の中でAPに匹敵する力をつけさせることができるか。

(2) テクノロジーが無に等しい教育環境の中で、いかにテクノロジーに対応させた授業を進めていくか。

(3) APコースを受講せずAP試験を希望する生徒のために、いかに試験の準備をさせていくか。

(4) 日本語APコース(四年目学習)をサポートしない学校環境の中で、生徒のやる気やゴールをいかに上まで伸ばしていくか。

そして、高等教育機関との課題としては、大学における教材又はカリキュラム内容、大学におけるPlacement Testの内容と重要点、大学高校の両者における、指導法を含めた教育内容の類似点と相違点の把握などが重要点として上げられる。そのために必要となってくるのは、大学高校の両者における教材、意見交換又は授業見学や、学生との意見交換の実施である。

<おわりに>

ボストン・ラテン・アカデミーのようにAPコースがなく、しかも大学に入るまで一年間の空白を強いられる学習者がいるプログラムでは、初期段階から基礎力と応用力が身につくような授業の工夫が求められる。そして、暗記中心や型を真似て試される日本語ではなく、学習者が柔軟に自主的に使える日本語を指導していくことが重要となる。

ここでは、当プログラムにおけるこれまでの工夫と対策例を紹介したが、実際にこれらの内容がAPコースに匹敵するのか、大学教育において接点があるのか、又はAP、大学のコース内容に向け強化すべきことは何なのか、高等教育機関とのコミュニケーションが重要となってくる。そして、高校と大学での教授法やカリキュラム、教材の相違点などについて両者が把握し、互いに溝を埋めていく努力が求められる。